

2020年11月号

「原点」

法人案内の中に、「“経験と知識を有し、人間性豊かなシニア”を中心に、ミドルやジュニアともしなやかに連携できる集団による社会貢献型組織です。」と書いています。なんとなく胡散臭い、という声も無きにしも非ずです。“人間性豊かなシニアを中心に社会貢献を目指す”などを見たらそう思われるのは当然でしょう。しかし、そういうからには、きちんとした信念が必要です。

前号同様に、また、昔話になりますが、母校の助手をしてその後私立大学に移ってしばらくしたあるとき、いろいろなことが思い通りにならないので指導教官だった Y 教授に愚痴を言ったことがあります。その時に言われたことが生涯を決めるメッセージになりました。いわく、「君は考え方を間違えている。自分の人生は自分で全て決められる、と思っているようだが、それは間違いだ。むしろ、“自分の人生は人が決めてくれる”と思った方がいい。では、君は何をどうすればいいか？といえ、ば、“他人のために何ができるか”を中心に考えて生きていくべきだ。そうすれば、自然に君のことは君を見ている他の人が決めてくれるのだ。そういう風に考えたまえ。」

以来、ことあるごとに思い起こし若い方々に紹介をさせていただいていますが、定年前のあるとき、稲盛和夫著「生き方」（サイマーク出版、2004）に“利他の精神”というのが仏教にあって氏はこれを生き方の基本にしている、という意味のことを書かれているのを読みました。わが意を得たり、と思ったのですが、書籍のレビュー欄を見ますと、「時代錯誤の古い経営者の考え方で、禁書にすべきだ」という極論もあるのには驚きました。一方で、デジタル中心の社会であろうとアナログ中心の社会であろうと、人間の生き方の原点は変わるものではなく、このような批判（時代錯誤の古い経営者の考え方だ）にはアナログ人間には受け入れられない、という真逆のコメントもありました。

私は、数学はあまり得意ではありませんので、詳しいことはわからないのですが、原点そのものは、企業であれ、大学であれ、簡単には変わるものではない、と思っています。ですから、新型コロナウイルスと共存していく社会が長く続くとしても、本法人は社会貢献型の組織で、“先義後利”の社是は、“揺るぎない原点”として動かさないものと思っています。

“思いがけぬ new normal のせいゆえか

夢野を巡る 孫たちの声”

(2020年11月13日)